

“The Basement Room” について

—悪意なき愚行—

植木 利彦

倉敷芸術科学大学教養学部

(1999年9月30日 受理)

I

“The Basement Room”¹⁾は、少年の無垢の喪失をその主要なテーマとした作品であり、グリーンの小説世界の原型と言えるものである。しかしながら、グリーンは無垢というものを決して肯定しているわけではない。*The Other Man: Conversations With Graham Greene*において、彼は、‘Innocence and pity. Innocence can be exceedingly foolish, disastrous—like that of Pyle, the quiet American.’²⁾と述べている。このことは、人間、無垢のままにいることはほめられたことではなく、幼い子供が、無垢の状態から何でもありの大人の世界への移行を経験することは生きていくために必然的なこととして捉えている。だからといって、大人の世界が素晴らしいものであると言っているわけでもない。それどころか、グリーンを描く大人の世界は、ピンキーやスコウビーが経験した裏切り、暴力、猜疑、陰謀、強欲などに満ちあふれた世界でしかない。つまるところ、グリーンにとっては、人間が生きることそのものが、煉獄なのである。³⁾

只、子供が大人の世界へ移行するにしても、例えば、そこには十分な時間的余裕があって、徐々に大人の世界での出来事を経験するとか、大人の世界を垣間見るに相応しい下町的環境のなかで育てられるといった準備がされているのがごく自然な形であろう。この場合、子供は時間の経過とともに大人の世界に対する抵抗力や免疫力が付き何とか順応していける。そうした準備が整わない人生の出発点の段階でいきなり大人の醜い世界を味わわされ、理解できない出来事に巻き込まれ、人生の終着駅である「死」に直面させられた場合、子供の精神的衝撃の大きさは計り知れないものがある。この問題に関しては、多くの批評家がこの“The Basement Room”のフィリップの心理について言及しているところである。この小論では、執事であるベインズとその夫人の人柄にも焦点を当てて、総ての悲劇の原因はベインズ夫妻のエゴイズムに源を発する愚行にあったことに注目しながら、フィリップの精神的軌跡を追ってみたい。

II

ベインズは、アフリカで生活したことはあるのだろうが、本当に40人もの黒人を配下に

持ち、指揮を執っていたのだろうか。いずれにせよ、ベインズのアフリカでの話は、フィリップを喜ばせるための悪意のない誇張された作り話（Telling the boy stories p.460）である。しかし、聞いている幼いフィリップは、まだ物事の真偽を判断するほどの人生経験はなく、ベインズの話は総て真実であると思いつこんでいる。ベインズの語る大人の世界は彼にとっては、素晴らしい夢とロマンに満ちた世界なのである。だからフィリップの目にはベインズは男らしい冒険的生活を送ってきた英雄として映っているのも無理からぬことである。そして今、レイン（Lane）家で執事として働いているベインズは、主人が留守であつても仕事に手抜きをせず、きちんと家事をこなす彼の妻とは対照的に、主人が居なくなるこの機会を待ち望んでいたものであり（Bains had looked forward to this. p.461）、仕事の手を抜き、半袖姿でくつろいでいる（Bains was reading a newspaper in his shirt-sleeves. p.458）。そして彼は今、彼ら夫婦の住まいである地下室にフィリップを招き入れた。フィリップが地下室に入っていったときのベインズの様子を次のように描写している。

He sat there over his ginger pop with the resigned dignity of an exile; Baines didn't complain; he had chosen his fate, and if his fate was Mrs Baines he had only himself to blame. (p.459)

この文章はフィリップの目に映るベインズの姿であるが、幼い彼がこのような印象を持つのではなく、明らかに作者グリーンの目に映るベインズの姿である。この小説の序文において「……この作品の主題はとうてい映画になるまいと思われた……きわめて好感の持てる人物の犯した殺人と、……」⁴⁾と述べているとおり、グリーンはベインズに同情的である。しかし執事としての彼は、仕事を先延ばしにし、フィリップに間食をさせたり、歯磨きも励行させず甘やかす、主人の息子に敬語を使わずに話しかけたり、新聞を買いに走らせる。甘やかすこと、気さくに友達の如く話しかけること、おもしろい作り話を聞かせることは、確かに子供に気に入られるだろうが、彼の行為は執事としては誉められたことではない。

彼の作り話からも解るように彼は虚栄心の強い男である。その虚栄心の強さは、恋人とおぼしきエミーを説得している熱心な様子からも分かる。妻帯者のベインズは初老に近い歳であり、エミーは非常に若い。彼らの将来には何の希望ももてないことから判断しても、年長者である彼が分別を発揮し、エミーの幸せを考えてやらなくてはならないのに、ずるずると今までの関係を続けようとする彼の行為は利己的であり、軽率の排りを免れない。また、フィリップがベインズ夫人の反対にもかかわらず、散歩に出かけた後、ベインズはフィリップを探しに出かけたようであるが、彼はフィリップの探索はそっちのけで、その機会を利用して、エミーに会っているところをフィリップに見つかったと考えるのが一番妥当な見方である。いずれにせよ、家のすぐ近くでエミーに逢うなんてことは、全くの不注意で彼の愚かさを示すものである。

ベインズ夫人は、服装にも仕事にも非常に几帳面で、夫の尻をたたいて仕事に駆り立てる。女性らしい魅力や優しさ、家庭的な暖かさに欠け、どこことなくギスギスした感じであり、老醜が忍び寄る年齢ではあるが、階段の上でベインズともみ合いになっても “she could beat his face, but she mustn’t bite; she could push, but she mustn’t kick.” (pp. 478–9) どんなときでも威厳と分別を失わない理性的な女性であるが、同時に、“She was the kind of woman who thought that any injustice could be counterbalanced by something good to eat.” (p. 461) という利己的な一面を持った人間でもある。召使いとしてはフィリップの躰けにも厳しく (‘Eating between meals, What would your mother say, Master Philip?’ p. 460), 事務的ではあるが屋敷内での仕事をきっちりこなしていること、主人が留守であっても、陰ひなたなく仕事を遂行することからしても有能な召使いであることを認めなくてはならない。

ベインズ夫人はくずかごの中に棄てた使いさしの化粧品の瓶がなくなっていることをフィリップに問いただしているが、彼女には、持ち去ったのが夫であり、夫が浮気をしていることを薄々気づいている。だから、夫のあらゆる行動に対して疑惑の目を向けて追求している非常に勘の鋭い女性である。従って、フィリップの散歩にしてもベインズが家の外に出かける口実にしそうなので、それを阻止している。そのようなギスギスした夫婦関係にあるので、夫人の態度が夫にたいして威圧的になるのも仕方のないことである。だからベインズの表情に囚われた動物的な表情が見える (he looked at Bains for help and only intercepted hate; the sad hopeless hate of something behind bars. p. 463)。その結果、彼女にたいするベインズの恐怖感が “‘There’s nothing she wouldn’t dare’” (p. 463) とベインズに言わしめているのであり、彼女の性格がいかにしつこく執拗であるかを強調している。彼女の執念深さは、エミーと会っている時にフィリップの声を妻の声と聞き間違っ縮あがったベインズの言葉にも現れている。

‘It’s not your fault, Phil. Why, I could really believe it wasn’t you at all, but her. She creeps in everywhere.’ (p. 466)

長年にわたる結婚生活の慣れからくる倦怠、夫に他の女がいるらしい疑惑、仕事への責任感等から生じる夫婦間の不和の問題は大人の世界の出来事であり、幼いフィリップに理解できるわけがない。むしろベインズがアフリカでの冒険的な生活を止めたのは、夫人と結婚したことがそのきっかけのようにベインズが話すところから、ベインズを男らしい生活からつまらない生活に追い込んでいるのは、何かにつけ夫に口うるさくいうベインズ夫人であるとフィリップが幼心に思うのも仕方のないことだろう。彼の大好きなベインズにあれこれ指図し、フィリップを連れてベインズが外出することを認めようとしないう夫人は、ベインズを虐めているようにフィリップの目に映る。フィリップにはベインズ夫人の夫に裏切られた悲しさと相手の女性に対する憎しみ、年老いていく辛さ、愛されていない寂しさを理解することは無理であり、それ故にベインズ夫人の姿や行動まで益々意地悪で

魔女的なものに見えてくる。逆にフィリップは虐められているように見えるベインズをかわいそうに思い、父親が留守の今、彼にたいして主人としての責任と憐憫さえ覚えている。

更に、ベインズ夫人の地味な黒っぽい服装、瘦せた体格、事務的な仕事ぶり、ベインズに対する命令的な口調、フィリップに対する時には威圧的、時には迎合的な態度、そうしたものがフィリップの心の中に話に聴き、夢に見た魔女のイメージを連想させ、彼女にたいする嫌悪感を育て上げている。

she was darkness when the night-light went out in a draught ; she was the frozen blocks of earth he had seen one winter in a graveyard when someone said, 'They need an electric drill' ; she was the flowers gone bad and smelling in the little closet room at Penstanley. There was nothing to laugh about. You had to endure her when she was there and forget about her quickly when she was away, suppress the thought of her, ram it down deep.
(p. 466)

更に、グリーン自身も執念深く、底の知れない不気味な、謎めいた闇の世界を象徴する人物として彼女を起用している。

The night-light stood beside the mirror and Mrs Baines could see there her own reflection, misery and cruelty wavering in the glass, age and dust and nothing to hope for. She sobbed without tears, a dry, breathless sound, but her cruelty was a kind of pride which kept her going ; it was her best quality, she would have been merely pitiable without it.
(p. 477)

ベインズ夫人は人を怖がらせる闇のような存在として描かれているが、これは、裏を返せば、彼女の性格の厳しさ、意志の強さの現れであろう。フィリップにエミーが素敵な女性だと聞かされたときの “‘She was nice, was she?’” (p. 469) と聞き返すベインズ夫人の声は、 “a bitter voice he wasn't used to” (p. 469) であった。夫に裏切られた妻の憎しみ、そして自分自身が年とともに女性としての魅力を失っていく悲しみ、苦しみ、若い相手に対する嫉妬がこの言葉に込められている。この夫婦の住む地下室の異様な雰囲気、 “a strange passion he couldn't understand moving in the basement room.” (p. 462) は、子供のフィリップにも感じ取れたのである。

彼ら夫婦は、彼らの個人的なエゴイズムの戦いにフィリップを巻き込んでいるのである。彼らは、フィリップの両親が不在の間、保護と育児を任されているフィリップのために行動するのではなく、ベインズはエミーと会いたいエゴを満足させるためにフィリップを利用し、挙げ句の果ては、密会を見られたことを夫人に告げないように約束させたのである。細君は、夫の鼻を証すためにフィリップに彼女が二人の密会を知っていることを話

さないように約束させているのである。すなわち、ベインズ夫妻の愚かな考えと行為が、朝にはあれほど新たな人生に強い好奇心をのぞかせていたのに、2日目の夜には人生についてなにも知らない真っ白のキャンパスのようなフィリップの心に利己的な思いに渦巻く大人の世界の醜さと恐ろしさを強く描き込んでしまったのである。

Ⅲ

フィリップにとって、両親が二週間の休暇で旅行に出かけ、前の育児係が辞め、次の育児係が来るまでの間は、まさに自分の意志で行動ができる絶好の機会である。彼はこの機会を自分の自由を実現する機会であり、大人の世界を覗くチャンスと見ている (Philip began to live. p.457)。

フィリップは郵便配達夫のノックからフランス革命時代の革命派が王党派の人物を捕らえに来たときのノックを連想し、王党派の人間の首が籠の中に転がり落ちる光景を想像したり、警察官が玄関ドアの郵便入れから家の中を覗き込む理由を育児係に尋ね、異常がないか確認しているのだとの答えを得ても、起こり得るあらゆる不幸を想像したり、人一倍闇を怖がり、ベインズ夫人と魔女とを関連づけて想像する感受性の非常に強い子供である。そういう子供であるから、ベインズの作り話からフィリップがベインズは血沸き肉踊る冒険的な生活をアフリカで送っていたと想像を巡らしていることは容易に考えられる。フィリップの心の中では、次第にベインズが冒険談の英雄的存在、憧れの的になっている。彼こそ世界を見てきた大人なのである。そしてそのベインズはフィリップに対して友人の如く話しかけ、彼を一人前の大人として扱ってくれているような気がする。だからベインズからエミーに会っていたことを細君に言わないように頼まれたとき、その意味も解らず、仲間意識に駆られ、精神的な背伸びをし、大人の真似をして安請け合いをする。彼は一人前の大人になった気分だろうが、彼は自分の意に反して、ベインズの秘密を守られる立場に追い込まれたのである。勿論、フィリップにはその約束を破るつもりなど毛頭ないが、ベインズ夫人にとってフィリップを誘導尋問にかけて、事実を引き出すことは、赤子の手を捻るような簡単なことである。彼は意に反して信義を破り、裏切られたのだ。その屈辱感と失望感は計り知れないものである。同時に大人の狡猾さ、卑劣さに憤怒したことだろう。にもかかわらず、大嫌いなベインズ夫人に一方的に押しつけられた夫に内緒にしておくようにという約束の不合理性、大人の身勝手さがフィリップの心を大きく捻れさせる結果を引き起こしていく。大人は、相手の意志など無視して一方的に責任を負わせる。そしてそれを破ったときの自責の念を思うとき、大人のエゴイズムは果てしなく人を苦しめるものでしかない。更に姪だというエミーと会っていたことを隠そうとするベインズと、二人が会っていたことを知っている事実を隠そうとする夫人のこの不可解な行動がフィリップを精神的混乱に陥れている。理解しがたいエミーの存在そのものがまさに大人の世界そのものである。すなわち、大人の世界には、子供の世界には見られな

かった新しい事態の本質が見えてくるのであるが、彼には経験不足からその本質をどのように理解していいのか全く解らないのである。

フィリップはまさに心の準備も経験もなく、彼を守ってくれる両親もいない時に不意に恐ろしい経験に見舞われたといえる。幼い子供には、事情が好都合に組み合わせられなかったら、自己を絶えざる失敗や不成功から安全に保護する能力は備わっていないのである。それだけではない。フィリップがそれまで夢で見たその恐怖の対象と似通ったペインズ夫人が最も安全な聖域、子供部屋にまで忍び込んできて、ペインズとエミーの居場所をフィリップから聞き出そうとする。彼が逃げ込める安全な場所はもはや家の中にもなくなったのだ。“It wasn’t fair, the walls were down again between his world and theirs,” (p.477) 大人は確立されたルールを守らず、自分たちの都合だけで、入ってはならない子供の夢の世界にまで土足で踏み込んでくる。子供の世界は、大人のエゴイズムの前に脆くも破壊されてしまう。“The whole house had been turned over to the grown-up world; he wasn’t safe in the night nursery; their passions had flooded in.” (p.479) まさに “he was touching something he touched in dreams; the bleeding head, the wolves, the knock, knock, knock. Life fell on him with savagery.” (p.478) 徐々に経験を積み、対処する know-how を身につければ、いつかフィリップも対決できたであろう人生の恐怖が突然彼に襲いかかってきたのである。それでも彼は、ペインズに対する信義から恐怖心を克服して、夫人が戻っていることをペインズに知らせようと悲鳴をあげる。これがフィリップにとって精一杯の恐怖にたいする反抗であった。フィリップの裏切りを知って、フィリップの方に階段を駆け登ってくるペインズ夫人の姿は、まさに悪夢の中に見る魔女そのものである。

Mrs Baines turned and saw him cowering in his pyjamas by the banisters; he was helpless, more helpless even than Baines, and cruelty grew at the sight of him and drove her up the stairs. The nightmare was on him again and he couldn’t move; he hadn’t any more courage left, he couldn’t even scream. (p.478)

彼女の姿は、フィリップには阿修羅のように見えたであろうが、夫に裏切られ、フィリップに裏切られた救いのない絶望的な女の姿である。その姿のあまりの恐ろしさに人生を歩みだしたばかりのフィリップはこのときまさに人生に立ち向かう勇気と精神力を完全になくしたのである。そしてペインズ夫人が階段の手すりを乗り越えて玄関先へと人生の終着駅に向かって落下し、“she lay before the front door like a sack of coals which should have gone down the area into the basement.” (p.479) それは彼にとっては初めての死との対峙である。新しい人生を経験しようと踏み出したばかりのフィリップが大人の世界と接触して経験したことは、裏切り、失望、騙し、憎悪、猜疑心、復讐、恐怖そして死、それ以外の何物でもなかった。

フィリップがさまよい歩く町は、この界隈を縦横無尽に走り回る下町の子供たちにとっ

ては、無垢の世界から大人の世界への橋渡しをしてくれる世界であって、遊び慣れ、知り尽くした世界である。彼らは家庭と地域社会、子供の世界と大人の世界が入り交じったこの地帯で大人の世界へ入る準備を時間をかけて行っているのである。ところが、箱入り息子のフィリップは、同年代の子供と遊ぶこともなく、自分の住居のすぐ近くにある下町でも方向すら解らず、途方に暮れている。このことは、彼がこうした世界を全く知らないことを意味している。彼はこの緩衝地帯で多くの経験を積める家庭的環境にもなく、いきなり複雑怪奇な大人の世界に投げ出されたのだ。従って、その困惑、失望感そして恐怖心たるものは、我々の想像を遙かに越えたものであろう。その結果、彼は警察官を前にして、ベインズがしきりにフィリップに事件の詳細を隠すように懇願する視線を送るにもかかわらず、彼は二度と彼の理解の領域を越えた大人の世界に足を踏み入れることを拒否する。

…; there wouldn't be any more secrets to keep; he surrendered responsibility once and for all. Let grown-up people keep to their world and he would keep to his, safe in the small garden between the plane-trees. (p. 480)

フィリップは、彼を送り届けた若い警察官にたいして “‘It was all Emmy's fault’” (p. 488) といい、警察官は “‘who was she?’” (p. 488) と聞き返すが、この不幸な出来事のすべての原因は彼には理解できないエミーが現れたことにあって考えている。つまり、エミーは彼の理解を超えた不可解な大人の世界を象徴する存在なのである。だからフィリップがいう「すべてエミーが悪いんだ」という言葉は、「すべて大人の世界が悪いんだ」ということであり、臨終の床で言う「彼女はだれだね?」という言葉は、「大人の世界とはなにかね?」という言葉と同じことである。また、その言葉は、死の床にあって、あの60年昔の出来事が彼の心を捕らえているほど強烈な印象を残す出来ごとであったことを示すものでもある。

IV

フィリップは両親と育児係、そして召使いに守られ大切に育てられている箱入り息子である。これまでの彼の一日のスケジュールは総て大人たちによって決められている。つまり、“The Basement Room” のフィリップは、純粹培養された温室の中の植物のような存在である。彼の住んでいる地域も閑静な高級住宅街で、フィリップが、ベインズ夫人の不慮の事故後、大人の世界から逃げ出したくなって、さまよい歩いた夜遅くなっても子供が表を走り回っている下町とは大違いである。社会的環境においても彼は、明らかに一般的な子供とは異なった隔離された世界に生きている。また、邸宅の中でもそのおかれている環境は、明確に確立されている。すなわちフィリップの子供部屋のある二階は、彼と彼の保護者である両親のみが住む安全な無垢の世界である。一階という緩衝地帯或いは no-man's-land を挟んでベインズ夫妻の住む地下室という構造になっている。この地下室こそ不

倫、猜疑、憎悪、陰謀等の舞台となる大人の世界を象徴するものである。この構図は、*The Lawless Roads* や *A Sort of Life* に見られるグリーン自身の少年時代の父親が校長をしていた寄宿学校と家とのイメージに酷似するものである。

Two countries just here lay side by side.... If you pushed open a green baize door in a passage by my father's study, you entered another passage deceptively similar, but none the less you were on alien ground.....

I was an inhabitant of both counties : on Saturday and Sunday afternoons of one side of the baize door, the rest of the week of the other. How can life on a border be other than restless? You are pulled by different ties of hate and love. For hate is quite as powerful a tie : it demands allegiance. In the land of the skyscrapers, of stone stairs and cracked bells ringing early, one was aware of fear and hate, a kind of lawlessness—appalling cruelties could be practised without a second thought ; one met for the first time characters, adult and adolescent, who bore about them the genuine quality of evil.... Hell lay about them in their infancy.⁵⁾

更に *Journey Without Map* では次のように述べている。

In a Christain land we have grown so accustomed to the idea of a spiritual war, of God and Satan, that this supernatural world, which is neither good nor evil but simply Power, is almost beyond sympathetic comprehension. Not quite : for those witches which haunted our childhood were neither good nor evil. They terrified us with their power, but we knew all the time that we must not escape them. They simply demanded recognition : flight was a weakness.⁶⁾

この「力」とは目に見えない超自然的なものであり、我々に不安と恐怖を与え、更にはその最終地点にある死を予感させる世界、未知な領域、闇の世界の総称といえる。この未知の領域、闇の世界を恐れる子供の恐怖心は童心の無垢性であり、グリーンは、「童心の無垢性は、それ自身善でもなければ悪でもないが、「生の恐怖は」はその無垢の内に内在するのだ。」⁷⁾という。そしてグリーンも言っているように、子供はいつかこの未知の世界に踏み出して行かなくてはならない。そのことを子供は本能的に感じ取っているのである。「要するに子供は人生の浮き沈みをおおかたは承知しているのであって、ただその浮き沈みに立ち向かう態度を決めかねているだけなのだ。人生には臆病、屈辱、うそ、失意がつきものであることを十分に知っている。」⁸⁾

子供は無力であり、無知（無垢）なるが故に、この未知な世界を怖れるが、大部分の子供は、成長するにつれ、無垢の喪失に比例して、知恵と体力を獲得することによってこの世界に立ち向かう能力を徐々に手に入れる。

しかしながら、時として、子供に過酷な試練が降りかかるとき、その強い影響は後世までその子の精神に深い影響を残すことをグリーンは「幼年時代の重荷」のなかでディケンズとキプリングを例に挙げて次のように述べている。

たとえばディケンズとキプリングほどの違いはあっても、幼年時代の重荷を払いのけることのできない作家たちがいる。ディケンズの場合には靴墨工場に棄てられた思い出が、キプリングの場合には街はずれの埃っぽい街道筋の意地の悪いローザ叔母さんの家にあずけられた思い出が、生涯忘れられなかった。後の生活のすべてが、この数ヶ月あるいは数年の不幸な生活と関係があったように思われる。たいていの人の場合は彼らが自己防衛の手口を身につける年頃になってから人生が残酷な様相を明らかにするのに、この二人の作家の場合は、まだ身を守ることも知らない幼年時代の初期に、それが不意打ちをくらわしたのだ。⁹⁾

おなじことがフィリップについても言えるのである。彼には無垢の世界と大人の世界の間にある緩衝地帯での経験が無かったこと、出来事があまりにも子供が理解するには複雑すぎたこと、そして彼の目の前で死がその実体を見せたことなどが、フィリップの精神とその後の人生に決定的な影響を及ぼしたのである。すなわち、フィリップは他人とかかわりあいになることは、そこから引き起こされる自分の生存のあらゆる恐怖と正面から向かい合わなくてはならない事態をまねくこと、相手にたいする愛や憐憫は何物ももたらさないことを知ったのである。だから、フィリップは彼の世界へ他の者が侵入することを拒み、そして彼自身が他人の人生に干渉することを拒否する人生をあえて選んだのである。

生活条件はフィリップと全く正反対であるが、やはり緩衝地帯での経験もなくいきなり大人の世界に放り込まれたのが、*Brighton Rock* のピンキーである。フィリップとは違って、ピンキーは極貧のカトリック教徒が生活しているパラダイス・ピースに生まれた。家族が生活する場は限られており、狭い住宅では子供部屋などを持つ余裕はない。家族がごろ寝をするような状態であり、彼は初めから否応なしに大人の世界に置かれていた。彼には逃げ込める場所すらないのである。

It was Saturday night. His father panted like a man at the end of a race and his mother made a horrifying sound of pleasurable pain. He was filled with hatred, disgust, loneliness: he was completely abandoned: he had no share in their thoughts—for the space of a few minutes he was dead, he was like a soul in purgatory watching the shameless act of a beloved person.¹⁰⁾

ピンキーは、誰もが経験する大人たちに守られた揺籃期を持たないまま、生まれた当初から大人の世界に放り込まれ、その醜さを目の当たりにしながら成長し、自分がその醜い大人になることにどこまでも抵抗して生きる努力を続けた。一方、フィリップは揺籃期にあまりにも過保護であったため人生を歩み始めたばかりの入口で、他の人間のエゴイズム

のために失望感、恐怖、屈辱感を味わわされ、個人の意志とは無関係に無理矢理責任を押しつけてくる大人の世界を怖れ、総てを放棄し、人生から隠遁したのである。彼ら二人は、方法は違うが、共に大人の世界で生きることを拒否した人生を選んだ人間である。

Notes

- 1) Graham Greene; *Collected Stories*, (London: The Bodley Head & William Heinemann, 1974) 以後の英文の引用は本書からの頁数のみ表示。
- 2) Marie-Françoise Allain, *The Other Man: Conversations With Graham Greene*, (London: The Bodley Head, 1983) p. 26
- 3) Marie-Françoise Allain, p. 21 グリーンは、マリ＝フランソワーズ・アランの“what is purgatory?” という質問にたいして、“It's what we—you and I—are living through at this moment.” と答えている。
- 4) 小津次郎、青木雄造、丸谷才一訳、グレーム・グリーン全集11, 早川書房、東京、昭和61年、p. 113
- 5) Graham Greene; *The Lawless Roads*, (London: William Heinemann & The Bodley Head, 1978) pp. 1—2
- 6) Graham Greene, *Journey Without Map*, (London: William Heinemann & The Bodley Head, 1978) pp. 202—3
- 7) 田中西二郎訳、『地図のない旅』, 新潮社、東京、昭和29年、p. 254
- 8) 前川祐一訳、グレーム・グリーン『神・人・悪魔』, 早川書房、東京、昭和62年、p. 20
- 9) 前川祐一、p. 113
- 10) Graham Greene; *Brighton Rock*, (London: William Heinemann & The Bodley Head, 1986), p. 232

On “The Basement Room” — Foolish behaviors without malice —

Toshihiko UEKI

Faculty of Liberal Arts and Science,

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 1999)

“The Basement Room” is the novel in which Greene explores the loss of innocence of childhood, and it is regarded as the archetype of Greene’s novels. But Greene does not affirm that innocence is a precious quality. In *The Other Man: Conversations With Graham Greene*, he says, ‘Innocence and pity. Innocence can be exceedingly foolish, disastrous —like that of Pyle, the quiet American.’ This means that a man with innocence alone can not live through in this world. If a child wants to live through, it is inevitable for him or her to grow up from an innocent child into a grown-up who has enough experiences and ability to live through in this world.

In the process of growing into a man, everybody ordinarily experiences many things little by little which will be seen and heard in the grown-up world. But in “The Basement Room,” the protagonist, Philip was suddenly thrown in a trouble caused by foolish behaviors of Mr and Mrs Baines. When he was suddenly dragged in an incident which he could not understand, and also saw the ignoble side of the grown-up world and Mrs Baines falling to her death, it is over our understanding how deeply and strongly Philip was exposed to the mental and emotional shock.

In this paper, we want to follow the track of his mental and emotional shock, and inquire why he renounced the world and lived in his own world.